

令和5年度 泉大津市立図書館協議会

■第2回会議の議事概要

日 時：令和5年7月29日（土）午後1時00分～午後4時00分

場 所：泉大津市立図書館オープンセミナースペース

出 席：嶋田会長、高橋副会長、阿児委員、岡本委員、澤谷委員、高島委員、谷合委員

公開の有無：公開

議 事

(1) 泉大津市こどもの読書活動推進計画策定について

議事概要

(1) 泉大津市こどもの読書活動推進計画策定について

《主な意見等の内容》

泉大津市こどもの読書推進活動計画について、事務局より補足説明

岡本委員：前回までの議論でいい整理になっていると思っているが、一つ改めて言うなら、最近深く考えさせられていることをもう少し入れたい。おそらく図書館関係者ではあれば気にしなかった人はいないと思うが、芥川賞受賞において市川沙央さんが発言された読書に関するユニバーサルなアクセシビリティを本当に真剣に還付すべきだという発言があった。これはわたしたち大人が真摯に反省しなくてはいけないと改めて思った次第である。紙の本の手触りがいい、インクの匂いがいいという発言がいかにも暴力的で非常に排他的であったことを真摯に反省する必要がある。今回、この計画の中においても読書に対するアクセシビリティ、いわゆる普通に本を読むだけでなく、文字や言葉に対して触れるということにおいてあらゆる手をつくすという喚起点がもう一度再検討されたほうがよいと思った。

今回の場合、市川さんが芥川賞を受賞されたことによってより声が届くようになった部分もあると思うが、当事者による参画を得ることによって、わたしたちは多様な気付きを得られ、誤りを正すいい機会だと感じる。それはできていなかった点を顧みて、改めてもう一度再点検する。そして変えるには遅すぎないし、まさに今ここをきちんと取り入れることを提案したいと思った。

高橋委員：学校では国語の授業でビブリオバトルやアニメーションなど、できるだけこどもが身近に読書に接することができるよう各学校で工夫しながら行っている。本校においても、現在学校内の整備を行っており、図書室も作り替えたところである。そこでこどもが足を運びやすいよう本の内容や配置、週刊誌や月刊誌など手に取りやすい雑誌を置き、ゆっくりで

きるソファなど環境整備に努めている。環境が大事だと考えている。

澤谷委員：大阪府が大阪府視覚障がい者等の読書環境の整備の推進に関する計画(読書バリアフリー計画)を令和3年3月に策定している。泉大津市もこちらと並列して、ということ視野にいれながら、岡本委員も言われたように考えてもらえるといい。こどもたちもそうだが、そういった障害のあるこどもを持つ保護者がアクセスをすることにハードルが高いこともあるのではないかと。計画にある大人という言葉に役所の方たちはもちろん入っていると思うが、役所でもなく保護者でもなく、例えば地域の方などをしっかりと明記したうえで計画を立てていただきたい。やはりその部分を書かなければ、その方たちは自分事にならないのではないかと。大阪市でも「地域の方が」というところを強調して書くようにしていた。そういったことができれば皆さんが当事者と思ってもらえるのではないかと。

高島委員：環境整備の面がとても充実していると感じると同時に、人的な部分が最後に一行で済まされているところが、具体的な内容はまだ決まっていなくても、環境整備のほうに大分重きを置いた計画になっているのだろうかと感じた。読書ボランティアの育成など、もう少し市民が自発的に関わられるような中身が計画に盛り込めればいいのではないかと。また、岡本委員が言われたアクセシビリティの話聞いて、泉大津市の小学校に School e-Library というデジタル図書でいつでもタブレットで本が読める環境が整備されている。それ自体はとても素晴らしく読書のアクセシビリティを高める点で、どの家庭のこどもも本が読めるのはいいものだと思うが、実際に利用がされているのか市民として評価してほしい。なぜかという、家でこどもに聞いても使ったことがない、友達にも学校で使っているところを見たことがないと言っている。なぜかと聞くとパスワード入力が面倒、読みたい本がないと言って、結局は図書室で借りている。無料ならいいが、それなりの金額を払っているという。PTAから聞いたところによると、本来なら市が今まで負担していた料金の一部をPTA会費で賄われているという。それがどのくらい有効活用されているのか。活用されていないのであれば、そもそも保護者が知らない可能性もある。私自身も市長の SNS で知ったので、周知の徹底やどう利用されているのかしっかり評価してほしい。

谷合委員：私は専門図書館に勤務しているのでこどもの利用者がいない。門外漢の人間として皆さんの意見を聞いて、考えをまとめたいと思っていたが、ずっと感じていたのは読むことの多様性が本当に大切だということ。バリアフリーという言葉があるが、文字が書かれていない本や電子書籍など、色々な表現形態、キャリアやメディアなどを含め、取っ掛かりがあればこどもたちは興味をもつだろう。話は少し違うが、小説からアニメ化、マンガ化などメディアミックスはとても多い。どこからでもいいので何か引っかければ、例えば、映画を見て面白かったので、原作とどこが違うのか確かめてみたいから原作を読みたい、と思うことなどあるのではないだろうか。

阿児委員：私は博物館で情報担当をしていて、この計画案のマンガ部分を見て思ったのは、環境整備はしっかり描かれているが、人が見えない。勤務先の博物館では来館者の5割ほどが外国人。多言語でパンフレットを7言語、説明を4言語、オーディオガイドも用意をしているが、来館者が頼りにしているのはボランティアの方々である。インフォメーションカウンターや近くにいるスタッフなど、この人に尋ねれば自分が求めていることがすぐにわかるというように、情報は整理してあるが人が介してその情報を提供することが大事。今回のマンガの中でもあまり人が出てこない。そこにどういう人がいるのかが見えづらい。最後には関係部署が関わっていることが書かれているが、そこだけを見てもどういう人たちがいるのかが見えないというギャップがある。例えば最後に挙げられている各所が関わっていることがマンガの中でも表れてくるととてもいいのではないか。色々なところで読む活動や読める場所など読書に触れる機会があることに、役所の様々な部署と人たちが関わっていることが見えてくるといい。

また、このマンガのタイトルはまだ決まっていない。これがどういうタイトルで子どもたちの手元にいくのかで全然違う。「こども読書活動推進計画」というタイトルにしたらきっと子どもは読まない。タイトルは非常に大事である。何というタイトルで、どのような形、タイトルでこの計画が広まっていくのがいいのかまできちんと議論され、協議会も我々以外の方々も取り込んで考えていく必要があるのではないかと感じている。

嶋田委員：まず、計画をマンガ仕立てでシンプルに本質的なことを、主役である子どもたちに理解してもらおうかということ、また、最後のページではあくまでこの計画を大人が実行するための計画であるという基本的な考え方を挙げていただいている。その後の計画の枠組みとして目指す姿や環境整備について様々な部署と連携によって、どのような形にしているかを説明もいただいている。ここで改めて、我々も交わす議論については理解をしているが、議論の進め方の中でこのペーパーでは十分に説明がなされていない部分も含めて、今後の議論の展開について事務局から補足をお願いしたい。

事務局：読書のバリアフリーというキーワードが出ていたので元々図書館資料として排架しているLLブックをお持ちした。また、前回の子どもたちとのワークショップを踏まえ、漢字を読むことが厳しいと感じた。この計画を進めるに当たって、障がいをもっている子どもたちの視点をしっかり入れたいという意見を当初から申し上げていた。ここではあえて「障がいのあるこども」という文字は計画の中には入れていないが、様々な視点で環境を整えることが「障がいのあるこども」への環境整備にもつながると考え、やさしい日本語で書かれているものなどを集めている。また、子どもたちからおもちゃというキーワードが出ていたので、その延長上で布のおもちゃがあってもいいのではないかと捉え、こちらも収集をしている。今日、お話ししたいところでは、マンガの部分である。イラストで伝える

ため文字を大分と端折っており、言葉足らずの部分もある。第一弾として図書館スタッフが書いたもので、説明が足りていない文もあると思われるため、必要と思われる言葉やカット、表現として読み取ってもらうのではなく明記したほうが良いと思われる言葉や高島委員から意見いただいた人的な整備の面など具体的な例があればお教えいただきたい。

岡本委員：まさに我々は行間を読むという能力を発揮するべきところだと考える。すべてを文字に表すという発想やその前提自体を問う必要がある。私自身、行政の計画策定の仕事で、最近あえて空白スペースを作ること而努力して行っており、この最後の一行は皆さんが埋めていくものです、という書き方を提案することが非常に多い。行政計画としてはやや異例とは思いますが、実は大事なメッセージである。つまり、作ってしまったものを押し付けるのではなく、最後の一行を埋めるのはむしろ主権者である皆さんであり、納税者である皆さん自身の役割でもあり、同時に行政はすべての項目に対して100パーセントを達成するというよりは市民と共に作り上げていくというような書きぶりにするといいのではないか。特に最後のページに対しては、その手法が良いと思われる。ここに足りていないと思う事は何だかと思うかを書いてもらい、そして最後に学校のクラス単位で話し合うという取り組みにすれば、押しつけではなく子どもたちが主体的に参加し、行政プロセスや政治プロセスに参加してくることに繋がるのではないか。また、それと同時に行間を読むということをお互いに努めることが明示的に示されるとよい。言葉として言明し得るのには限界があり、そこにおいて我々はやはり互いに言語化できていないが汲み取るように努めなくてはならないことがお互いにあるということはきちんと訴えられてよいのではないか。先ほど市川沙央さんの話を出したが、あれほど強い言葉を持つ人はそうそういない。我々はもっと正しい意味で察し、その人たちが本当に必要としていることを言語的に表現されていなくても、どこかに表現されているものを汲み取っていくようなところを比較的明示的な努めとして記されたほうがよいのではないか。

嶋田委員：今の話を総合すると、今回の計画というのはあらゆることを書き切るというよりは重要な事について柱ができていて、そこに対する受け止める方からの意見や具体的な取り組みが含まれてくるような、そのように問いかけるような計画になるのではないか。私も行政にいたので、このようなことをやりますという市民に対する約束を計画として非常にきれいなものとして書くが、それがどれだけ達成されたかという面ではいろいろな課題がある。泉大津市としてはどのような文章として市民と一緒に作っていく計画を最終的にまとめていただくわけだが、泉大津市教育委員会の方からも意見をいただけないか。

生涯学習課係長：環境整備がこの計画で特に重要視されていることは理解している。本市は図書館が1館しかないという体制の中で、まちぐるみ図書館というキーワードで市内の色々なところで本や学びに触れられる環境づくりをしていくことが大事だと、これまで図書館

整備のタイミングの頃から申し上げてきた。それをこの計画に載せていくことが大きなテーマだと思うが、ページ数も少ない中でわかりやすく子どもたちが理解をでき、実行していくことが重要だと考えている。そのようにどうすればマンガでわかりやすくなるのかを考えたとき、マンガの余白部分にシーブラでは多種多様な事業をしており、年間400回を超えるイベントを行っているのは大きな特徴と考えるため、中でも計画の対象となるような概ね18歳以下の方へのイベントを行っている事がわかるよう、チェックポイントのように記号と併せて書き込むなど現在図書館でやっている事をわかるようにするのがよいのではないか。この計画では水面下に隠れてしまっていて見えにくいのがもったいないという気持ちがある。また、目標としていくものも数値ではないというところも議論をしながら、コマの中で目標に向けていくことを4ページにある最終目標と関連付けて、1～3ページと最後の4ページ目がリンクしているような計画になれば、より子どもたちにもわかりやすく実行に繋がる計画になるのではないか。

生涯学習課長：このようなスタイルの行政計画は初めてなので戸惑っているが、基本的にこの計画は環境整備に力を入れていくということで進めていき、環境整備という意見の中で読書バリアフリーやアクセシビリティをはじめとした多くの意見を最後のページに出せるように考えてはいる。ただし、すべての環境整備については載せることができない、といったときに泉大津市の計画として何を目玉にしてこのマンガを描くといいのかを委員の方々にご意見をいただき、最後のページと連動させることができるといいのではないかと。また、子どもたちが読むのはマンガでいいが、行政がやっていくバックグラウンドの部分をどのように示していくといいのかをご教示いただきたい。

嶋田委員：環境整備について還元してもらえる課とどのような協力関係や営み必要なのかという部分は文章にせざるを得ないと思うが、政策的な構造を文章にする計画はあるのか。

事務局：この中には敢えて示さず、泉大津市立図書館のHPにしっかりと文章として載せ、QRコードのようなものから飛んでいただくことを考えている。ただし、こどもの読書活動推進計画の後ろによくあるような言葉の説明については、知りたいと思う方には調べてほしいという気持ちがある。わからない事について全てを解説するのではなく、疑問に思った事を自分で調べるといった流れを作ることも大事にしたい。全てを入れ込まず、調べたいと思ったときにすぐに答えが出るようなものを作る必要があるとは考えている。

教育部次長：澤谷委員からユニバーサルアクセシビリティや障がいを持つ人たちについて意見をいただいたときに思ったことだが、行政や地域の方など各事業に対して、誰がいつ何をするかを書かなければならないのではないかと考える。通常であれば30～50Pの計画が作られるのが一般的なので、本計画は画期的なやり方ではあるが、その計画で不足してい

る部分については実施計画的なもので示す必要があるのではないか。また、高島委員から話のあった電子図書についても、環境整備をすることは行政の大きな役割だが、その後、授業に入れるのか休憩時間や家庭など、どうこどもに使ってもらえるよう促すかのソフト部分も大事であり、それは他の環境整備についても必要と考える。そのあたりもこの計画には書けなくともやはり実施計画等で示していく必要がある。

教育部長：やはり行政としては斬新な計画で、これを議会、その先の市民に見せるときに、どこかにこの取り組みが見えるという計画が重要と考える。例えばブックスタート事業というものがあるが、この計画の中でブックスタート事業がどこに出てくるのか探そうとすると、どこかに QR コードを出すのか、あるいは泉大津市内の読書に関する基幹施設はシーブラしかないと思っているので、すべての情報発信はシーブラが基地になっているというような見せ方ができないだろうか。また、学校連携については他の自治体より進みつつあるので、それが学校に波及して、高島委員が言われたように School e-Library をこどもたちがより自分たちで読みたくなるような仕掛けを埋めておくことも必要である。赤ちゃんのための読み聞かせも保護者や祖父母の方にどう働きかけていくか、小さな頃からどのような環境でどのように働きかけていけばいいのかなど、何かの取り組みが垣間見えるとよいのではないか。

教育長：まずこども読書活動推進計画を計画していくのが楽しみで仕方がない。何故かというと泉大津のこどもたちは読書していく文化が非常に薄い。60 数年泉大津市で生活をしてきて、時代に翻弄されている部分はたくさんあるが、例えばゆとり世代のときに中学生が読書をするかということと高校入試が変わらないので 5 教科の試験勉強に追われて自分の学校の図書館に行く時間が全くない。また、財政難に陥っていた泉大津市が 11 校に対して新しい本を購入する予算をどれだけ出してきたかということ非常に情けない。そういう過去の流れが尾を引いているというのか、シーブラができて、こどもたちが図書館で勉強している姿を見て感動していて、ここからがスタートだと考えている。もう一点は、こどもと行政と学校だけではなく、家庭の教育力にも協力をアピールしていかないといけないのではないか。生活することに大変な家庭もあるが、本を読むことや図書館に行くことなど、こどもたちが本を読むことに家でどのように動機付けをするか、外的動機づけが重要である。そしてこどもたちがこの本やマンガを読んでどう内的動機付けを高めていくのか。その動機付けがあって、初めて大人の学習方略がこどもたちの身に付いていくのか。そして本を読んだことによって、メタ認知されるという回りが大事ではないかと思っている。もう一つ、これは直接関係ないが、シーブラは性善説の上に成り立っている。しかし、行政は市民からクレームがくればルールを作ってしまう性悪説に陥る。このギャップはとても苦しい。シーブラは苦情が来てもルールを作らず一生懸命やってきているので、この計画もこどもの性善説の上に成り立っていけばいいと考える。

嶋田委員：開館からの泉大津市立図書館を利用したお客様の声というものに目を通したが、まさに苦情も出ているところが、一方でそこがいいという声もちゃんとあり、どちらかといえばそちらの方が強いと感じた。

阿児委員：性善性悪ではないが、博物館も自由に話をしながら見たいという展示もあれば静かに鑑賞したいという人たちもいる。そういう視点で改めてマンガを見ると、一人のこどもの姿が多い。しかし4月のワークショップ時に意見を貰ったのは友達同士での場面の話が多かった。これを見ると個別で使っている人が多い。教育長も言われたが、公園や図書館であればルールを設けなくても友達と一緒に使っていき、みんなが居心地のいい場づくりをしていくような気がしている。博物館でも一人の鑑賞、グループでの鑑賞、それぞれがお互いの居心地の良さで成り立っている。そこに読書や読むことに関するお互いの居心地のよさが含まれるといいのではないか。

高橋委員：中学生や小学生にとっての図書館というと学校の図書室である。そこがいかにかに利用しやすいか、調べ学習や読書だけではなく、敷居を低くしてどんどん利用しやすい仕組みや環境整備をして、読書以外でももっと活用できる図書室を整備していく必要があると考えている。

高島委員：前回、読むことの多様性について話をされていたが、このマンガを見ると読むということが、知識を得ること、知ることに偏重しているのではないかと感じた。例えば、まちぐるみ図書館のシーンでは、本をいたるところに置く。だから興味があることをすぐ調べることができる、というように知ることというのが最初に来ている。教育長からの意見にもあったように、もともと泉大津のこどもたちに読書の文化が薄く、今ようやく変わりつつある段階である。しかも小さいこどもたちにとっては、知ることよりもまず本を読むこと、読んで楽しむこと、本と出会うことがあって、その後知ることでもいいのではないか。結果的に知識を得ることになるかもしれないが、こどもたちが純粋に本と向き合うときは、単にお話の世界を楽しむことなどをもう少し伝えることはできないだろうか。

澤谷委員：お話と向き合うことももちろん大事だが、なぜこどもに本を読ませないといけな
いのかをまず考える必要がある。ワークショップに参加したこどもたちは明らかにWi-Fiを
使いに来たというようなことも言っていたが、それもWi-Fiが使える環境があり、スマホで
情報を収集している。こどもたちがこれから生きていくための力を文字や表現などの文化
によって得るためのものだと考えている。情報を得ることも大事であり本を読むことも大
事であるが、こどもたちが選択できるよう両方を描けたらいい。

事務局：スタート地点としては本を読むことが楽しいところからだと思うが、4 ページ目に泉大津の未来は、と書いているので、将来的に読むことが楽しい、知ることが楽しいになってきたときに、最終的に一番言いたいのは、何か事があったときに疑問を抱き調べてわかる、伝えられるというサイクルが目指すところの未来と考え図書館を運営している。読むこと知ることだけでなく両方のその先にあるものを記したい。また、阿児委員が言われたように複数のこどもたちの絵を描いていなかったのは反省すべきところである。ワークショップのときも「友達」という視点の発言をしてくれていたのも、その思いをきちんと反映させておく必要があった。また、障がいのあるこどもたちを文字として出していないのは、障がいのあるこどもたちに向けてだけでなく色々な配慮をしていけば全てがクリアになるのではないか。シーブラではルールを作らず、喋っても使い方を間違っても怒らないようにしたところ、図書館は静かにしなければいけないから行かないと言っていたこどもたちがどんどん来るようになったことで、いろいろなタイプのこどもたちが来てくれる。結果、泉大津以外の地域にお住まいの重度障がいを持つお子さんと保護者から、地元の図書館では静かにしないといけないので排除をされたが、シーブラでは配慮をしてもらえて有難いという言葉をいただいた。今までの図書館を使っていなかった方たちに向けて、こちらがルールを作らず、従来の図書館を当たり前にならないことで、障がいのあるこどもたちも使いやすい図書館になっているのではないかと感じている。

嶋田委員：このシーブラ自体が学び合い、築き合い、教え合い、思い合い、気を使い合う。自由だから自分が認められている、受け入れられている、尊重されていると感じるからこそ、他者に対して或いは空間全体に対してもそのように振舞えるのではないだろうか。実際問題色々な事が起こるが、図書館の皆さんが上手く包摂する中で教育委員会としても広く受け止め、新しい施策を打ち出しているところにシーブラの魅力があると思う。この泉大津市の図書館、教育委員会で作るこどもたちの読書の環境づくりということなので、まさにそのように自由であること、また支え合うということは、今流行の言葉で言えばケアである。そのケアが一つのキーワードになるのではないか。

谷合委員：マンガの中にもあるが、疑問・調べる・わかる・伝えるは学術情報のサイクルである。情報を入手し、自分で調査をして、加工して発信し、また新たな情報と価値を生むというサイクルだが、そういったことまでできる人はそう多くはない。全員がこれをできればもちろんいいが、そこまでできなくとも楽しんで本を読んで終わるエンドユーザーでも構わない。目標は決して一つではない。とはいえ、今のような SNS の時代になると誰でも発信者になる。そうすると、フェイクニュースに飛びつきすぐ拡散させるなど、このサイクルがいびつに回る可能性がある。図書館で本を読む、調べるというだけでなく、いかに情報の正誤を判断するかということも、大人が配慮しなければいけないことも非常に多い。また、4 ページ目にこの 15 年ぐらいで比較的新しい取り組みで注目を浴びてきたような、ビブ

リオバトルや本の通帳など新しいことが生まれてきているが、シーブラでしかできないオリジナルなことはあるのか。もちろん新規性やオリジナリティを考えずに、やるべきことをやっていたらいい。いろいろな先進事例を開館するときに取り入れたので、これだけの来館があると思う。私もお客様の声を読んだが、図書館に来ない人にはどうするかも知恵を出し合っていないといけない。

澤谷委員：行政の計画というのはインプットもアウトプットも行政側で指標を用意すると思うが、アウトプットの部分は用意しなくていいのではないか。こちらはインプットとなる情報を並べ、それをどう扱うかというアウトプットは市民や子どもたちに考えてもらうという計画は目新しいのではないか。こちらが想像して用意するものは、先日のWSのように子どもたちは全く違うことを言ったりしていて、大人が全てを準備すると子どもたちは考えなくなってしまうような気がしている。これとこれを組み合わせるとこんなことができた、というような、岡本委員も先ほど言われた余白の部分を子どもたちが考えられるよう内容をもう少し見える化して、ビブリオバトルなど既にやっているようなことは書かずに、子どもたちと一緒に考えていける人がいるという部分を強調したほうがいいのではないかと感じた。

嶋田委員：アクティブラーニングのためのラーニングコモンズスペースがまさにそういう枠組みで、何でもできるが何をどう使うかはワークフリーで学生に任されている。公共図書館でも子どもたちが読む知るということについて環境を作っておくというニュアンスだと思うが、この論点をもう少し掘り下げ、どのような方法で作ってあげればいいだろうか。

岡本委員：一つ補っておいたほうがいいのは、人というところだと考える。昨日、東京都杉並区で区長と区民の対話があり、YouTubeに上がっていて話題になっている。図書館のサービスなどをこのレベルで継続的に供給し続けることに、現在のような労働環境であることは現実味があるのか、という鋭い指摘を区長自ら切り出されていた。区民は非常に行き届いたサービスで民間委託を非常に良いと言うが、しかしそれはかなり無理がある労働市場によって成されている。杉並区として果たしてこのような調達をし続けることが許されるのか、ということも区長側が繰り返してかなり大きなインパクトになると思われる。それらを踏まえたときに、人の体制ということを提供される仕組み、整備される環境としてきちんと謳うことが大事になってくると考える。それをどういう形にするのかは議論あることだと思うが、と同時にそれはただ職場環境を保障されるという話だけではなく、そこに配置されるべき人はどれだけ励まなくてはいけないかというコミットでもある。ただ貸出をしているだけでは全くこの要求には見合わない。そういう様々な希望に合う、知りたい分かったという欲求を持った子どもあるいは大人に対して向き合えるだけの人はどうあるべきなのか、と同時にそれは泉大津という街においてどうやってその人を育成しキープし続け

られるかを少し組み込まれたほうがいい気がしている。難しい話だとは思いますが、行政機構においてこれだけ人材確保が難しくなってきた現実があり、本気で考えないと大阪府の場合、大阪市と堺市にすべての人材が集約されて終わる。神奈川県で見れば主要な人材は横浜市と川崎市で充足しているわけで、西部エリアの自治体にいくと定員割れしている。同じようなことが大阪府の場合はおそらく南部地域で起きる。府内における北部南部格差があるわけで、府全体としてどうかは置いておき、泉大津だけでどう人材を確保するかということだけを考えてやる気を出したほうがいい。このような環境で育っていく子どもたちにとって、こういう場で出会った図書館の人が一つのロールモデルたり得なければ駄目だろうなという気がする。将来あの人のような働き方をしたいと思ってくれるか、泉大津で働いてくれれば言うことはないがそうではないとしても、そこに憧れをもてるようなロールモデルの提示ができなければ、正直ここに教育コストをかける意味がトータルでいうとなくなるだろう。何のために人材投資に泉大津の税金を注ぎ込むかというロールモデルを含めて、どのように市として人材像をこの中でもう少し議論してもいいのではないか。今どうしても行政機構において人材論に踏み込むことは難しいように見られているが、しかし多分5年もすれば絶対にどの自治体も絶対に論じてくる。なぜなら民間企業において人材論はちょっと前まで軽んじられてきた。しかし今民間企業において最も注力されているのは人的な資源として人間こそが経営資源であることを強く考え、上場企業は皆この報告書を書いている。国でもそういった観点での検討を行っている。私がIT企業にいた頃からすれば信じられないことが起きており、おそらくそれは10年以内に公共分野に必ず起きると考えると、今ここで先手を打っておくというのは政策論としてけっこう意味のある一石になると考える。

嶋田委員：高橋委員に伺いたいですが、学校図書館をメディアセンターと名付けたのは動機付けや意図があったのか。

高橋委員：新しく作り替えるというのが直接的なきっかけだが、図書室をただ図書の部屋だけで終わらせたくなく、子どもたちは1台ずつタブレットも持っており、学校のどこでもタブレットを使って勉強ができる。その中の一つとして図書室も選択肢にしたい、ワークショップを開いたりやZoomを繋いで海外の学校と一緒に活動したりするのもメディアセンターがあればすごく手軽にいつでもできる。ただ本を読むだけを超越した場所として整備している。今子どもたちがプロジェクト学習を進めているが、メディアセンターの一画をカフェにする計画を立てており、こういうソファが欲しいなどいろいろな意見が出ている。

教育長：教育長になって今年で5年目だが、学校の図書には非常にお金をかけている。金額は調べてもらえばわかるが、何故かという先ほど高島委員が言われていたように、読むというスタートのところが中学校の図書館は酷かった。国が定めている図書館の冊数があるが、とにかく本の新陳代謝がなく、流行りのマンガなどしか入れていなかった暗黒の時代

が10年、20年ぐらい続いていた。過去の古い本まで1冊に数えなければ、文科省が定めている学校図書館の冊数に全く足りない現状である。それをとにかく何とか改善するべく泉大津市とシーブラとの連携で図書館の副館長が学校の図書室に行き、全部の連携が取れるように本の並べ方から全て一校ずつ回っている現状で、条東小学校をモデル校として図書通帳機を導入した。また人材という話が出ていたが、大和川以南は取り残されているのは現実味が出ていて、学力としても低い。その中で今年度の学力学習調査があったが、小学校の国語の全ての観点で全国、府平均を上回っていた。本当に地道ではあるが、小学校の先生たちは読むことや書くこと、リーディングスキルにおいて授業づくりも含めて非常に頑張ってくれている。小中一貫教育を銘打っている中で、それを中学校がどれだけ維持できるかはプレッシャーをかけている。要求ばかりではなく、やることをやろうというのが教育委員会のスタンスである。

阿児委員：人が見えるというのは非常に大事だと思っている。図書館はカウンターに立っている人や制服で図書館の人だとわかるが、小規模な博物館、地域の博物館ではホームページに学芸員の職員の顔写真を付けた紹介があり、動植物の化石の専門家がいる、などの文も付いている。そうすると、こどもたちも自分たちが博物館に何か知りたいたいと思って遊びに行くと、あの人が答えてくれるんだというように人が見える。地域に所縁のない学芸員も多いが、博物館の目指すところなどに責任を持ち、さらに地域の人たちに自分の専門性として知っていただきたいので、人の顔が見える形になってきている。シーブラも職員の顔が見える状態であり、今日の協議会も我々委員と行政の皆さんの顔が見える状態で会議を行われていることにとっても意味があるのではないかと考えているので、そのように顔の見える計画であり、顔の見える実施というのがとても大事になってきているのではないかと感じた。

岡本委員：シンプルに整理してまとめるならこれでよいが、QRコードの話においてその背景に繋がるようにしたいとあるが、それが必ずしもまとまっていなくてもいいと考える。雑多でもいいので、どのような議論があったのかどんなことが話し合われたのかを、きちんと追い求めることができるようにしておきたい。シンプルに提供するからこそ、特にこどもがどうしても思ったときに、このようなプロセスがあったことをきちんと追いかけることは悪くないと思っている。こんなにも多くの大人が頑張っていることを、こどもたちから見たら不足であったとしても、少なくともこれだけのことがされているということを、きちんと残したほうがいい。こども家庭庁も熱心にやっているが、それはこの先のこどもたちの主体的な政治参加や行政参加を踏まえたときに、一方でそういった政策の背景には結構な労力がかけられていて、相当な熟慮が成されていることを伝えたほうがいい。それは見ようによってはとても堅苦しい文書主義的なことであっても伝えたほうがいいし、それと同時に丁寧に整理しなくていいので、これだけのことをやったということを追えるような仕組みを作りたい。GitHubなどを使うなど履歴を管理して後で追えるような仕組み

を導入するなどして、後で振り返ったときに子どもたちや大人も検証できるように仕組みを作ることをやりたい。

教育長：学校長が作る教育計画というものがある。その中に図書館の年間計画を立てる部分がある。そこに十分反映されることが可能であるならば、この読書活動推進計画と学校長が作る教育計画と連携ができるような中身であるといい。学校の先生たちはこのような計画が決まっていることに弱い。敢えて学校の図書館で本を読むことや授業で活用するような流れが外的動機付けに関わることに繋がっていくので、そこが連携できるような中身であれば嬉しい。

高島委員：子どもの頃にいつも図書館に行くと、カウンターで声をかけてくれる司書がいて、わからないことがあると聞いたり少し騒いで怒られたりなどしたが、言葉に出さなくとも信頼感があった。それが大人になって偶然出会ったときにまた話ができる間柄になり、人の顔が見えるということはとても大事で、利用者だけが人であるだけでなく職員も人という部分を感じられる図書館であるといい。また、市民がこの計画に参加していくような仕組み作りや市民も人として育てていくことも大事ではないかと改めて感じた。

澤谷委員：図書館の人たちだけが読書活動推進計画を作っているのではなく、役所の色々な部署の方たちが作っているということをしかりと見せてほしい。そのような人たちがたくさんいて、自分がやっていることは実はこういった読書に関わっているということが見れば、自分事を感じられ、それが重なることで読書がもっと幅が増えると思っている。

谷合委員：やはり人は大事だと改めて思うが、公共図書館で人のキャラが立つのは難しい。そこが学芸員と司書の違いで、司書は利用者との距離が近すぎる。しかし子どもの頃を思い出すと学校司書にたくさん本を読んでいることを褒められたことが嬉しく、ますます本を読むようになった。そういったちょっとした声掛けがとても大事で、シープラでもやっているのを見たことがある。また前にも言ったが、読書活動推進計画のアクターに書店が入っていない。図書館だけではなく、本や情報が書いてあるものに接する書店をどこかにアクターのひとつとして巻き込むことはできないだろうか。

高橋委員：学校として本気で読書活動推進計画を進める気持ちをしかりともって実行することに限ると思っている。学校もやるのが山積みであるが、その中の上位に読書活動の推進において各校長が学校を導くことが大事である。

嶋田委員：高島委員より知ることに偏重しているかもしれないという指摘があった。前回の協議会でも紹介したかもしれないが、読書という言葉が Wikipedia で引くと、日本語では本

を読むこととしか紹介されていないが、中国版とアメリカ、ヨーロッパのいくつかの国では平たく言うと文字や図、数値などを認知して意味を理解すること、という意味のことが書かれている。それは英語の Reading という言葉に対する理解だが、そのように考えると日本で言う読書はいわゆる文学を読み楽しむというところに日本の公共図書館はウェイトが寄っているかもしれないので、そういう意味でのバランス感覚として今回知ることも読むこととの重要性とバランスで出てきているという議論であったのではないか。読むことで知り、知ることでまた読みたくなる。どちらが重い軽いではないと感じている。

嶋田委員：議論内容について、量的ではない計画終了時の目標設定について意見をいただきたい。

阿児委員：博物館でもワークショップなどの体験教室を開催することが多く、アンケートを取るが、何も次に繋がらない。そもそもどういう目標を設定したワークショップや体験教室であることに対してどういうことを得られたかを評価項目にするという研究をしたが、一つの手法として価値循環というキーワードがある。図書館や行政で環境を整備し、例えばそこで市民が本を読む。その環境全体で各者（市民、図書館、行政など）間において、価値がどう回っていったのかを挙げることができる。密度であれば本に触れる機会が増えた。次に誰かに紹介をしたのかなど、価値がどのように回ってきたのか、最後に図書館にどう戻ってきたのかというように、一回一回ではなくループしていくことを目標設定にするのも面白いのではないか。もう一つは評価項目自身をワークショップにしてはどうか。できれば計画を読む会をしたいと言われていたと思うが、計画を読んだときにどういうことが実施として達成されるのかなど、ワークショップに参加された方から聞き、期待とそれに対する自分たちが受けた印象の違いとギャップであったり、よりそれ以上のものが得られたりすることがあるのではないか。難しいとは思いますが、目標設定自身も自分たちで決めず、計画も皆さんで作り上げていくのであれば、目標も作り上げていくのはアイデアとしてはあるのではないか。

岡本委員：阿児委員が言われた意見から発展する話だが、第三者目線での評価をしっかりと入れるほうがいいだろう。最近一番勧めているのは大学としっかりと絡むことである。やはり自治体における行政評価の目線とは違う時間軸、評価軸で流れている組織からの評価を受け取るというのが非常に重要である。近隣の桃山学院大学や嶋田委員がいる京都橘大学でもいい。やはり研究的な観点で見ていただくのと、大学は下手に忸度しないので研究として遠慮なくぶった切っていただくのが良い。長期的に見ても、果たしてどれだけの意味があったのかということアカデミックにきちんと評価するのはとても重要な点ではないか。それとはまた別に行政内における評価として考えたときに、究極的に全施策に対して言えることだが、行政における施策の最終的な評価点は在住・在勤・在学のいずれかの3意向を

継続的に示すことができるかでしかない。結局自治体にとっての生命線というのは在住者・在勤者・在学者の獲得以外に答えはない。継続的にここに住み続ける、イコール住民税を支払う意思があることである。これは今風に言えば住民税のサブスクリプションである。私が住んでいる横浜市は市民税が高いので、在住し続けるかしないかを大きく分けている。ということは評価においても、最終的にはどれがよかったではなく、図書館の読書環境サービスを見て、本市に在住・在学・在勤し続けるモチベーションとして何点かをシンプルに聞くのがよい。それは同時に影響を及ぼす他の全施策にも評価をすべきであろう。そうすると横並びに評価もしやすい。一般的にいて社会教育系・図書館系のサービスは、この場合点が高くなりやすい。税の還元効果が明確に出やすい分野なので、おそらく道路整備などより遥かに市民支持が得やすい。それは図書館にとっていい部分であり、いずれにせよそれをどういふふうに評価をするかというのをここのようにまず考えてみるべきではないかというのは図書館発で通っていくといいのではないか。もちろんそれだけで評価できるものはないので、例えば自治体の場合、地雷になるもので言えば火葬場だろうか。火葬場があるから継続して居住意向を持つのはあり得ない。そういうのが出てきたら、果たしてどういう評価をすべきかということを考えるいいきっかけになるので、こういう評価を図書館としては実施し、市政全施策においても考えてみるべきではないか。同時にそこだけでは評価しきれないものをどう評価すべきかをまた考える問いかけになればいいのではないか。

澤谷委員：図書館の評価はすごく難しいとっていて、先ほど言われたように絶対に悪いという評価にはならないが、それが正しい評価なのかかわからない。前回言ったことと矛盾するかもしれないが、ある程度数字による評価も必要だと感じている。また、図書館やまちライブラリーに来る人の数も測れるものの一つであり、それを全て指標にする必要はないと思うがわかりやすい数字ではあるので持っておき、大きな目標は数字ではない指標のほうがある程度わかりやすいのではないか。

高島委員：密度の話は数的に明確にわかる点で誰もが客観的に見て判断できるのでいいと思うが、やはり質的な部分もアンケートなどで担保されていてほしい。特にまちぐるみ図書館や公的なところに関わらず、民間の本が置いてあるところも含めて増やしていくという話だったので、実際に本を置いているだけでなく本を目的にどのぐらい来て利用されているのか、ちゃんと運営されているのかを検証してほしい。2番の児童・生徒・教職員アンケートについては、保護者に対してもアンケートが必要である。計画策定のときに、家庭で読書をするという個人的なところに対してはなかなか入りづらいので環境整備を重視するという流れであったと思うが、教育長の話にも子どもが本を読むにあたっては家庭での関わりが外的動機付けで大事だとあったので、保護者に対してもアンケートをしていただきたい。

嶋田委員：教育長からは家庭の協力が重要である、高島委員からは保護者にもアンケートを、という意見が出たが、家庭の協力はどれだけ得られるものか。なかなか行政計画で家庭についてお願いをするのはデリケートな問題もある。例えばどんなことなら伺えるのか、どういうことなら評価の軸なり得るか。やりようによっては子どもを本嫌いにするようなことになりかねないので慎重に議論する必要があるが、もう少し意見を伺いたい。

高橋委員：学校でも評価については話題になる。本校では、先生が生徒を評価しますというものに加えて、生徒自身がどう評価してほしいか、自分自身の変化はどんなものかをひくくめた評価に変えようとしている。アンケートを取って、これがいいとか悪いとか言うよりも、利用したことによってどういう変化があったのか、このインパクトは大きかったのかなど本人の変容をしっかりと調査できるような簡単なアンケートが嬉しい。一般的なアンケートは学校現場では飽きているので。

高島委員：例えば保護者に、自分のこどもの学校の読書ボランティアができるならしてみたいか？ぐらいのアンケートでもいいと考える。そこでこどもの読書に関われる人が潜在的にこれだけいるのかとわかれば、またそこから一歩学校でそのような場が設けられることも可能かもしれない。現状は泉大津市の小学校では読書ボランティアとして保護者が学校に入っていく機会が全く無いので、潜在的なニーズがあるのか見てもいいのではないか。

教育部長：各校でもコミュニティスクールを進めており、本市ではみらい応援隊という名前で各校ボランティアを募っている。学校図書室開放は8校中5校まで進み、残り3校も順次開放していく予定である。そういった地域の中から本に関わりたいという方が出てきてくだされば非常に有難く、保護者の中からも出てきてくだされば非常に有意義だと思う。

教育長：保護者が学校に関わって読み聞かせをしていないというのは、たまたまその学校にないだけである。学校司書だけでは足りないため、みらい応援隊以前にも保護者ボランティアが低学年の図書の時間で読み聞かせ活動をしている学校がいくつかある。

嶋田委員：量的ではない目標設定は重要。量的目標をどこの自治体もなかなか置きたがらなかったが、滋賀県東近江市立図書館が最初にこどもの読書活動推進計画を立てたときに、学校司書の配置率などのインプットの部分は行政の責任として目標設定をした。子どもたちに評価軸を置くわけではないが、これは今まさに掲げてもいいかもしれない。

岡本委員：最近かなり力を入れた報道がされているが、学校図書館予算が適切に計上分配されているかを評価指標にするといいのではないか。本市の場合、文科省が定めるような基準を満たしているのか否か。否であれば何が理由なのかを明らかにするというのは、この話か

らすると大人側の環境整備が問題なので、もしできていないのであれば何が問題なのかを
解き明かしていくことは飛ばせないのではないかと。また先ほどの家庭の役割的なところは
すごく悩むところで、慎重にあるべきだと思っている。九州などは「うち読」の活動は非常
に強く、それは地域性にもよるがその活動を見ていると、ここまで家庭教育に口を出すのは
ちょっとやり過ぎなのではないかという気は拭えない。特に保護者から強い反発が出たら
どうするのか。それが信仰問題などを持ち出されたときに収拾がつかないだろうと思うケ
ースがあり、家庭でみてもそうだしこども一人一人にとっても内面の自由を考えたときに、
やはり中途半端に教育行政がタッチしないほうが良い世界だという気がする。一番の課題
は親が指導的な立場でこどもに接するような役割分担論で考えることの限界を感じる。そ
こは違うのではないかと。はっきり言えば、こどものほうが賢い。正直、できる子になればな
るほど親の指導を甘んじて受けるとは思えない。知力の点においてこどものほうが勝っ
ている現実を受け入れたほうがよい。そうすると私たちがすべき家庭への働きかけという
のは、大人自身が読書や情報知識に触れることに励むのを推進するのはいい。大人がこども
に対して指導的役割を果たすことは期待する必要は何もなく、期待する論理性が特にない
ので、やるべきことを明確にしたほうがよい。家庭の関わりという意味では、家庭にこども
への指導者として振る舞ってほしいわけではなく、良き理解者であってほしい。例えば、残念
ながらこの地域でもきっと女の子に学なんていらなないと思っている親は必ずいる。それが
いかに間違ったことであり、いかにこどもの世界を狭めるのかということ、これに関して
は強く働きかけるべきである。それは親の意思とは関係なく、こどもの自己決定権を侵害し
ているのでそのような振る舞いは好ましくないし、同時にそれは倫理的な問題ではなく、経
済合理性で誤った行動である。もし、「うち読」的な世界でやるならば、それが我々が発信
すべきメッセージだと捉えたほうが良い気がする。それぞれの地域性もあることだと思
うが、やはり慎重になりたい。「うち読」などの活動で様々な研究発表をされているのを聞
くと、すごいことをしているなと内心では思っている。別の意味で私たちが宗教教育に対
して感じる恐怖感や恐れと大差がないということも慎重になったほうが良いのではないかと
感じている。

嶋田委員：保護者ができるのは自分の読んだ本のことを語るぐらいで、それが家庭に協力い
ただけるぎりぎりの範囲ではないだろうか、話を聞きながら考えていた。この問題は今日
の議論で決定的な何かが出ることはないと思うが、いずれにしてもこどもたちの環境と
いうことで、オルデンバーグのサードプレイス論でいくと第一の場の家庭、第二の場の学校、
そして第三の場の地域となると思うが、そのいずれでも良い環境が作れると良い。第一の場
である家庭は、たしかに行政からはアプローチしにくいという課題があるが、その必要性に
ついて議論していくことはやはり念頭に置いておきたい。また、量的な部分では、例えば文
科省の学校図書館図書整備等 5 年計画が出ているが、地方交付税交付金の措置されてい
るものがどれくらい予算化されているかということも一つの評価軸になるだろうし、指摘

のあった学校図書標準も冊数はクリアしているが資料の鮮度が問題であるとのことなので、これは2021年に改訂された全国学校図書館協議会の学校図書廃棄基準を踏まえ、例えば熊本県では10年を目安に蔵書を入れ替えるという独自の政策を出しているという記事を読んだが、鮮度を保つということで、泉大津市独自の基準や全国学校図書館協議会の学校図書廃棄基準を参考にしながら量的な部分として大人責任ということで必要なのではないかと。

阿児委員：評価は終了時となっているが、こどもたちの変化や、自分自身がどう変わったかなどを評価するのに3年は長すぎるのではないかと。家庭の中で1年ごとにどう変わってきたかなど過程の把握が必要なのではないかと。学校図書室の開放が順次進んできている、そこに関わるボランティアも増えてきている、など過程をきちんと評価していくこと自身が大事なのではないだろうか。その点について、この計画で何か考えがあれば共有しておいたほうが目標設定に対しても変わってくると考えられるので教えていただきたい。

事務局：今の段階では、計画策定前である現時点と来年、再来年、最終年度の3年後で数を取るのかアンケートの集計を取るのかなどもあるが、変化を見ていきたいと考えている。

嶋田委員：確認しておきたいが、泉大津市で学校図書館司書の計画などはあるのか。

事務局：元々は有償ボランティアで入ってもらっていたのを会計年度任用職員として入れたが、勤務時間が短いためなるだけこどもたちがいる時間にいていただきたいこともあり、今年度から3名だけは長い時間での勤務をしてもらっている。予算の都合もあるので一旦人数は減っているが、図書館の整備に重点を置いて今年度は進めつつ、今後はフルタイムの司書が全ての学校に配置され、公共図書館と連携できればこどもたちに一体的なサービスができると考えている。見ているこどもたちは公共も学校も一緒である。

教育長：教育予算を取りに行くときに、まず一番に考えるのはこどものために、ということの大前提で言っているが、やはり人件費にはいい返事を貰えない現実がある。だからこそ、ハードの部分とソフトの部分を揃えたらいいものができるのは当たり前だが、何とか他市よりも少しでも予算を取って、その予算を使い、後は知恵と工夫とで何とか今まで担当者がものすごく苦労をしながらここまで来ているので、それを分かっているだけに何とかしてあげたいと思う。

岡本委員：そういう意味では、こういうことをすればいいだろうというのはわかっているので、政策的疑念に一押しのかっかかりが必要になる。正直に言って教育予算に関しては、ある程度明確な効果がうたいやすければ、比較的発動されやすい側面が明らかにある。次年度以降など、例えば石川県白山市や新潟県新潟市、宮城県名取市などの学校図書館の職員配置に

関してかなり意識的な政策を実施している自治体があるので、教育的に学校図書館司書配置と公共図書館運営とで連動させる形によるケースをきちんと研究して次に繋げたほうがいい。一番明確に政策効果を出しているのは明らかに秋田県東成瀬村であり、学力日本一というものすごくわかりやすい結果を出している。それは明らかに学校図書館がものすごく強く効いていることも村長が明言している。規模が違うとはいえ、小さな村だがそういったものを参考にして、予算を付ける名目として学力に対して効果があるというのは誰もが賛成しやすい。東成瀬村のケースというのは他の自治体には勧めないが本市に対していいと思うのは、小さな自治体だから実現できるモデルである。本市は大阪府下で唯一実現可能な規模感の市であり、これより大きくなるとできなくなる、そういったケースを次年度きちんと調査研究をしてやっていき、それが最終的に評価に結び付けられるようになるといいのではないかと。

嶋田委員：補足だが、宮城県名取市は本市と人口規模がほぼ変わらない市で、全学校に正規職員の学校司書がいる都市である。

教育長：大阪の一番南の端の町の中学校は常勤の司書を配置しており、今年度昨年度の学力調査の結果も全国平均より上である。

谷合委員：評価の量的な部分でいえば、数値化すると必ず右肩上がりをみんなが期待する。しかしずっと右肩上がりを維持することはできない。数値化するのであればインプットの部分で見ると見るべきであるが、それもむやみに右肩上がりを期待しない。また、目に見える変化もそんなにすぐに出るものではないので、3年で何かが変化するのは難しい。ただし子どもたちの1年というのはすごく変化が出てくると思われるので、学校で何かするのであればざっくりと「どう変わりましたか？」ぐらいのアンケートをしてみるといい。ただし、家庭に期待し過ぎると格差問題が出てくること、また、家庭から引き離れたほうがいい子どももいるので、そういう点では公共図書館は大事だと感じる。

岡本委員：量的評価と質的評価の使い分けというのは非常に大事にしたほうがいい。例えばアメリカ社会における量的評価は非常にメジャーだという認識が強いが、アメリカの本当に優れたビジネス書で非常に多いのは質的評価である。どんなふうに人が育ち、どういう来歴でその人物が積まれてきたか、アメリカのノンフィクション系の調査は必ずこの手法で来る。正直そこもしっかりやっていったほうがいいと考える。大学などと連携しながら継続的にきちんと追いかけていく。実際一人大きな成果が出ることである程度チャラという部分はあるのは事実だと思う。かつて益川さんという方がノーベル賞を受賞された。益川さんにはご自身の自認として一種の学習障害がある。学校教育に適應できない自分を支えたのは名古屋市鶴舞中央図書館であり、そこでひたすら本を読んでいたことが今の自分を作り

出したという決定的なスピーチがあった。それは正直、名古屋市の図書館政策を価値づけていて、どんな数字よりも一人のノーベル賞受賞者を生み出したというのはものすごいインパクトがある。それは益川先生を生み出したことだけがすべてではなく、一人の益川先生というサンプルがあって、おそらく何百人何千人という彼のような人を図書館は生み出したのであろう推認が働くわけである。そういったストーリーを追うことが大事である。ここがあるのであることによって救われたと考えているのはどのようなこがあるのか、どういうエピソードがあるのかをきちんと積み上げていくことは、十分政策効果である。それは必ず並行して両方ともやる。どちらかだけではなく、両方をやるというのが、今回の目標設定の柱にするというのではないか。量的評価と質的評価を必ず対にしてやっていくのを基本方式にするのがいいのではないか。

嶋田委員：これまでの議論を踏まえて、今日辿り着けたところや取り残しているところと、今後の協議会についての課題を整理いただけないか。

事務局：まず、一人ではなく他者がいる中での絵にして、こどもたちに対してあなた一人ではないというキーワードが見えてくるような絵と、読むことの多様性だけでなく対象となる人の多様性の部分もイラストで表していきたい。いただいたご意見の全てを入れてしまうとかなり長編のマンガになってしまうので、今すでにやっていることは改めて書く必要はないと考えている。今後しっかりやっていく部分を示すことができたらいい。大事になってくるところは4番の部分で、何を大きく書いて誰にどう戻ってきて、誰がどう動くかというのは全部をページには書くことができないのでフックになるようなものを載せて、後はQRで引っ張るという手法を取っていきたい。それを加えたものを修正してお示しできればと思っている。

終了 16:00